

第 2 講

ペンテコステの遺産: 異言を語ることの意義

ロバート・P・メンジーズ

はじめに: 父の言葉: 聖霊のバプテスマと異言とが切り離されたペンテコステ運動は存在しない。

・異言はなぜそれほどまでに重要だったのだろうか／重要なのだろうか。

異言は重要な象徴である。それはまず、私たちの「使徒の働き」の読み方を、正しい読み方だとして認定するものであるとともに、その読み方を象徴するものである。

「使徒」は模範である: 「彼らの体験は私たちの体験である」

第二に、異言は、聖霊のバプテスマに対する私たちの理解を、正しい理解だとして認定するものであるとともに、その理解を象徴するものである。異言を通して、私たちは、自分が何者であるかを思い起こさせられる。すなわち、私たちは預言者の共同体なのであり、イエスについての証しを大胆になすべく召され、力を与えられた者たちなのである。

このようなことから、異言は、ペンテコステ派の人々の歩みと実践にとって、重要な象徴(一つの sacrament)としての働きを果たすものである。

・ペンテコステ運動を特徴づけるものとなってきた異言を強調することは、聖書、とりわけルカ使徒から流れ出ている。(「かの書の民 (people of the book)」)

そこで、異言を語るということについて、ルカが強く語っていることを見ていこう。

1: 使徒 2:4 とルカのナラティブ

「使徒の働き」において、ルカは聖霊の最初の到来 (initial coming) について、4 箇所記述している: 使徒 2:4、8:17、10:46、19:6。

・注: (ペンテコステ派の初期の議論に基づいての) 福音派の議論 …… 使徒 2 章、8 章、9 章、10 章、19 章 (3/5)。

しかし、使徒 9 章は、パウロの体験についてすら記述していない。ルカの物語では 4 箇所のみ。

・4 箇所のうちの 3 箇所が、異言をこの出来事と明示的に結びつけている。使徒 8 章は異言について明白に語ってはいないが、「使徒」の文脈に照らし合わせて見るならば、どんなに理解に時間がかかる読者でも、ポイントは理解できることだろう。

・ここでは「使徒の働き」の中でも同様の言語表現が用いられている、三つの重要なテキストに絞ってみてみよう。すなわち、使徒 2 章、10 章、19 章の 3 箇所である。

— これらは異なる翻訳が存在することから、常に明白なわけではない:例、中国語と英語。

・和合本:シュオ・ファン・ヤン、シュオ・チー・ビエ・グオ・ダ・ファ

・異なる翻訳は、これらの物語に記されている様々に異なる現象の結果である:使徒 2 章:「ゼノラリア (xenolalia)」、使徒 10、19 章:「グロッソラリア (glossolalia)」

・しかし注意が必要である:これらの出来事に見られる相違点にもかかわらず、ルカは、これらの異なる章全てを記述するうえで、同じ言語表現を用いている:「異言を語る」という表現である。

このことが示しているのは、ルカはこれを意図的に結びつけているということである。この型はルカにとって重要なものである。ルカはこの結びつきを確立したいと願っていた:彼は使徒 2 章を模範として確立したいと願っていたのである。

使徒 2 章(「ゼノラリア」の物語)は、読者が異言というものの意義を理解するのを助けてくれるものとなっている:異言は、預言的な召しと、その召しをいただく者に対する油注ぎの象徴なのである。

このため、ルカのナラティブは、「異言」の反復を強調するべく — 注意深く、意図的に — 構成されている。それぞれのエピソードにおいて、異言が聖霊の訪れの「しるし」であり、さらに細かいこととしては、**預言的靈感のしるし**であることに注意されたい。

使徒 2 章 — ヨエルの預言が成就したことのしるし

使徒 10 章 — 彼らが「私たちと同じように(新改)／わたしたちと同様に(新共)」聖霊を受けたことのしるし。(ルカの読者と私たち(!)のために読み取れることに注意されたい)

使徒 19 章 — パウロの問いが答えられたことのしるし:「信じたとき(新改)／信仰に入ったとき(新共)、聖霊を受けましたか」

・結論:ルカ—使徒を自然に読むならば、ルカが一つの問いに対して明確に答えていることが読み取れる。すなわち、私たちは、ペンテコステ的な約束のもの(使 1:8) — すなわちモーセの願いに対する答え、ヨエルの預言の成就 — をいただいたということを、どのようにして知るところとなるのか、という問いである。

・ここで、次のように言う人もあるかもしれない。「そうだ、これはどれも理にかなって聞こえる……、ただ、ルカが、全てのクリスチャンが、聖霊のバプテスマを受けた際に、異言を語ることを期待しているという主張を裏づけるのに、本当にこれで十分なのだろうか」。あるいは、わかった、通常はそうなのだな、だが、規範にはできない、と言う人もあるかもしれない。

私は、ルカの福音書における一つのテキストが、この問題に対して、さらにわかりやすい手引きを与えてくれるものであると考えている。

2:ルカ 11:11-13

さらに別の重要なテキストがある。ルカ 11:13 である。この節の文脈は、祈りについてのイエスの教えである。(そして、ルカ 10 章は 70 名の派遣の箇所でもある)

ルカ 11:9-13 を読んでみよう(特に、ルカ 11:13(マタイ 7:11 も参照のこと))。「してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さないことがありましょ(新改訳)／「このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」(新共同訳)

注:マタイの福音書の並行記事には、微妙に異なる言い回しが含まれている。

「とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さないことがありましょ(新改訳)／「まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない」(新共同訳)(マタイ 7:9-11)

ルカがここで私たちに語っているのは、イエスのこの言葉(「良いもの」／「良い物」)を、私たちの歩みにいかに適用すべきかということである。ルカは私たちに、イエスのこの言葉に対して、聖霊に靈感された、権威にあふれる注解を与えてくれているのである。

— ここから三つのことが読み取れる:

1:ルカは自分の読者が、イエスのこの言葉を自分たちの歩みでどのように適用すべきかを理解できるように助けている。

— これらの言葉は、単に弟子たちのみに向けられたものでなく、ルカの自らの教会と私たち — 聖書を読む全ての人々 — にも向けられている。

— 父が求める者には聖霊を与えてくださるというこの約束は、ペンテコステの日に実現し始める。

2:この奨励は明らかに、クリスチャンに向けられたものである。

— 文脈が示しているところを見ると、この約束は弟子たちに対するものである(ルカ 11:1)

— ルカ—使徒は、第一には、クリスチャンに向けて、ルカの教会に向けて書かれた。

クリスチャンに向けられたものであるがゆえに、この約束は救いの賜物(新生)を指しているものとするとはできない。

— この判断は、ルカ 11:9 において、祈るようという奨励が、反復的な性質を帯びたものであることから裏づけられる:11:9 に見られる動詞は、反復的ないし継続的な行為を含意するものであることに注意せよ。ajjte:te(求めなさい)、zhte:te(捜しなさい)、krouvete(たたきなさい)。

3:他の箇所におけるルカの用法を見ると、彼は 11:13 における賜物としての聖霊を、預言的な力の賦与として見ていたことがわかる。

— ルカ使徒の二つの場面において、聖霊は祈る人々に与えられており¹、聖霊はその両方において、預言的活動の源として描かれている。

・イエスの洗礼についてのルカの記事を見ると、イエスが受洗後、祈っておられる際に聖霊を受けたと示されている(ルカ 3:21)。この賜物としての聖霊は、一義的には預言的な力の源として描かれており(ルカ 4:18-19)、救い主としてのお働きのために、イエスに力を与えるものである。

・後に、使徒 4:31 において、弟子たちは、祈った後、「一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした」(新改訳)／「皆、聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語りだした」(新共同訳)。ここでも、祈りに対する応答として与えられている聖霊は、預言的な活動を引き起こすものなのである。

ルカは、聖霊がこのように与えられることに対して、どのような預言的活動が伴うものと考えていたのだろうか。ルカのナラティブを読むと、そこにはなるほど、幅広い可能性が示唆されている:一部、列挙するだけでも、喜びに満ちた讚美、異言(グロッソラリア)、幻、迫害に直面しての大胆な証しなどが挙げられる。しかしながら、ルカのナラティブのいくつかの側面を見てみると、彼が賜物としての聖霊には異言を語ることが含まれること、それが、異言を語ることによって特徴づけられるものと感じていたことがわかる。

1:ルカ使徒においては、賜物としての聖霊は、典型的に異言を語ることを含む、あるいは、結果として異言を語るものとされている。さらには、ルカは、異言を語ることが聖霊の訪れのしるしであることを強調している。

2:この箇所では、求めること(9 節)と父が喜んで応答して下さること(13 節)が強調されているのを見ると、ルカの読者にとっても、現代のクリスチャンが尋ねるのと同じ問いを尋ねることが自然であったように思われる。すなわち、賜物としての聖霊をいただいたということは、どのようにしてわかるのか、という問いである。

・ここに私たちは、使徒 19:6 におけるパウロの問いが共鳴するのを耳にする。

もちろん、ルカは明白な回答を提供している。預言的な力の到来には、目に見える、外面的なしるし、すなわち異言(グロッソラリア)が伴う、ということである。

— 私はここに次のことを付加したい。それは、このしるしは、ルカの教会にとって、絶大なる励ましをもたらすものであったに違いないという点である。なぜなら、このことは、彼らが使徒の教会に結び合

¹ 上で議論している二箇所を除いては、使徒 8:15、1 が唯一、ルカ使徒において、聖霊を受けることが祈りと明示的に結びつけられている例である。しかしながら、この箇所では、聖霊は、ペテロとヨハネの祈りに対する応答として、サマリヤの人々に授けられている。使徒 8:15、17 における状況は、ルカ 11:13 と真に並行するものではない。使徒 8:15、17 では、聖霊は預言的な関連で描かれている。祈りは、ペンテコステにおいて聖霊が与えられたことと暗に結びつけられているだけであり(使 1:14、2:4)、ここでは、賜物としての聖霊が預言的なものの賦与として提示されている。同様の例は使徒 9:17 であるが、そこでは聖霊が与えられたこと自体は記述されていない。

れていることを示すものであり、終わりの世の預言者としての彼らのアイデンティティーを確認するものであったからである。

— 私が興味深いと思うのは、今日、伝統的な教会に属する非常に多くの人々が、異言(グロッソラリア)は目に見えるしるしであるという概念に対して、否定的な反応を示していることである。彼らはしばしば尋ねる。私たちは異言などのような、目に見えるしるしを本当に強調すべきなのか、という問いである。ところが、このようなクリスチャンたちが、同じく、聖餐式を守り、新しいクリスチャンに洗礼を授けている。聖餐式も、洗礼式もまた、同様に、しるしなのである。

しるしは、何か重要なものを指し示す時にこそ価値があるものである。ルカとその教会は、このことを明確に理解していたのである。

3:ここで問われるべき問いは次の問いである。すなわち、ルカはなぜ、自分の読者を、悪い、有害な賜物(11-12 節の蛇やさそりに注目されたい)を受け取ることを恐れぬよう励ます必要があったのか、という問いである。彼はなぜ、自らの教会に対し、この賜物としての聖霊を求めるよう励ます必要があったのだろうか。

— もしもこの賜物が静かなもの、内面的なものであったなら、そもそもなぜ、そのような懸念が生じることであろうか。

— しかしながら、もしもこの賜物が異言(グロッソラリア)を含むものであったなら、このような懸念も理解できる。ルカは読者に恐れるなど励ましている。父は良い賜物をお与えくださるのである。私たちには、恐れる必要はないのである。

・要するに、ルカはイエスのこの言葉(ルカ 11:13)を、自分の読者、自分の教会に適用しているのである。

ルカは彼らに対し、預言的な油注ぎ、イエスによって模範とされている人々(ルカ 3:21-22、10:21)、かつ、初代教会(使 2:4、10:46、19:6)と同様の体験を求めて祈るよう励ましているのである。

— 読者は自然に、異言(グロッソラリア)が、この体験の一部をなすものなのだと期待するようになったことであろう。

— ルカ—使徒のさらに大きな文脈を見ると、このような視点を支持するものとなっている。

— このテキストのメッセージ — 恐れてはならない — もまた、この視点を支持するものとなっている。このテキストは、それゆえ、私たちに次のことを語ってくれている。すなわち、ルカによれば、異言は良きものであり、あらゆるクリスチャンが求めて祈るべきものである、ということである。あらゆるクリスチャンがいただくことのできるものなのである。

結論

— ルカの観点について、まとめてみたい:

- ルカは聖霊が注がれたペンテコステの出来事を、モーセの願い(民 11:29)とヨエルの預言(ヨエル 2:28-32)の成就として提示している。したがって、それは聖霊に靈感された言葉によって特徴づけられる、預言的な油注ぎなのである。
- ルカによれば、異言は、しるしとしての役割を果たす、一つの特別なタイプの預言的な言葉なのである。
- ルカは、全てのクリスチャンに対して、異言を特徴とするこの預言的な賜物を求めて祈るようにと励ましている。

ルカは私たちに對し、自分が何者であるかを思い出すようにと励ましてくれている: 私たちは終わりの世にあって、神の預言者たちなのである。

私たちはイエスについて証しをするように召され、油を注がれている。異言を語ることは、この真理を象徴するものである。自分たちが使徒たちの教会と結び合わされていること、預言的な召しが与えられていること、神からの力が必要なことを思い出させてくれるものなのである。

思い出して欲しい。神は良い賜物だけを下さる。主が御手を私たちに伸ばして下さり、この部屋を揺さぶって下さり、そのご栄光のために用いてくださるよう祈り求めていこうではないか。

- 南京の物語 — 年配の学校教師 …… 異言と迫害